

診療放射線技師業務の多様性

江藤 芳浩

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長

ウイルスは変化する環境に適応して生き続けるために、遺伝子を変化させるといわれています。ウイルスは自身で増殖することができないため、ヒトなどの細胞に侵入して自らの遺伝子をコピーし、複製を大量に作成することで増殖します。全世界で猛威を振るう新型コロナウイルスは、遺伝情報のコピーミスで徐々に遺伝情報が変わってきていますが、ウイルスの性質が変化して感染力が強くなってしまふ場合があります。日本でも当初は武漢型ウイルスが広がりましたが、海外からアルファ株が入って置き換わり、その後、より感染力が強いデルタ株に、そして現在はオミクロン株に置き換わりつつあります。こうしたウイルスが増殖するための遺伝情報の変化は、ウイルスが備えた適応能力であり進化と言えるのかもしれませんが。



新型コロナウイルスの感染は単に人の健康や生命を脅かす問題だけではなく、出生率を低下させ、日本の少子高齢化に拍車を掛けているといわれています。日本は労働人口の減少に対して、女性や高齢者・障害者・外国人などの多様な人材を新たな働き手として確保することに注力しています。こうした状況は一見ネガティブに思える状況ですが、多様な人材によるアイデアや経験を生かすことができる環境は、イノベーションが生まれやすいというメリットがあります。また多様な人材を獲得するために働き方の選択肢を増やすことによって、育児や介護などで失っていた優秀な人材の流出を防ぐとともに、新たな人材を獲得して人的資産を確保することにもつながります。多様化を図る上で重要なことは、そのメリットとデメリットを見極めて、組織が発展できる仕組みをいかに構築するかということだと思えます。

現在、JARTは「対話と協調」を掲げてさまざまな活動を行っており、その一環として多くの医療職能団体や学会との連携を推進しています。放射線診療に関わるさまざまな団体がそれぞれの目的を持って活動していますが、国民（患者）や国の信頼をより深めていくことについては同じ価値を共有しています。今、求められているのは、放射線診療業界全体が一丸となって大きな力を発揮することだと思えます。今後も本会は、さまざまなガイドラインなどの作成や法令改正への対応、診療放射線技師教育制度の改善などに対して、他団体の意見に耳を傾け、情報共有しながら取り組んでまいります。その一環として、現在、日本放射線技術学会との合同学術大会の計画を進めておりますが、診療放射線技師が主体である職能団体と学会が融合することによって、新たなイノベーションが生まれることを期待しています。「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」という格言がありますが、これは多様性への対応において大切な理念だと考えています。本会の立場や目的を明確にしながら対話と協調を大切にして、関わる全ての方々と共に国民医療・放射線診療の発展という目標に向かって進んでまいりたいと思えます。

医師の長時間労働を是正するため、昨年10月に改正診療放射線技師法が施行されました。現在、拡大する診療放射線技師業務の安全性を担保することを目的に、診療放射線技師に対する告示研修が実施されているところです。近年の法令改正で思うことは、各職種が業務の一部を共有することが特別なことではなくなりつつあるということです。そうした中において、診療放射線技師が診療用放射線を扱うことによって、最適化が担保されていることを改めて認識していただく必要があります。一方、見方を変えれば診療放射線業務が診療放射線技師の独占業務ではないと仮定した場合、診療放射線技師が医療者として患者に何を提供することができるのかを問われている気がします。2024年に適用される医師の働き方改革は、今後も続く医療制度改革の一つであり、医師のタスク・シフトや職種間のタスク・シェアに加え、ICT (Information and Communication Technology) やAI (artificial intelligence) の活用なども含めた議論と改革は今後も継続されるでしょう。そうした議論において、改めて診療放射線技師が国民（患者）のために何ができるのか、業務の多様性を積極的に考えていく必要があるのではないのでしょうか。